

ひまわり発達相談センターの事業評価について 『発達支援理論研修のアンケート調査結果について』

1. 評価のねらい

ひまわり発達相談センター（以下「当センター」）では、発達支援に関する人材育成の一環として、平成 24 年度から研修事業を実施しています。研修事業には発達支援に関する知識、態度等の習得を目指す基礎研修及び理論とその具体的な手法の習得を目指す理論研修があります。

理論研修では、保育・教育の現場で活かせる発達支援の手法として、応用行動分析をとりあげました。応用行動分析の手法は、「行動は個人と環境の相互作用から生じている」という考え方を基に行動の意味を理解して対応を考えていく方法です。この手法は、子どもとの関わりを通して問題解決の手立てを探るための有効な手段であり、現場で活かすことができるのではないかと考え、3 年間研修を実施してきました。

今回、保育・教育の現場で応用行動分析の手法が役立つものとなっているかについて、受講者と所属長へのアンケート調査によりその実態を把握し、発達支援理論研修（以下「当研修」）の在り方を考察しました。

2. アンケート調査方法

当研修受講者の研修内容に関する理解及び活用、他の職員への伝達等の程度について、その実態を把握するためにアンケート調査を行いました。また、受講者及び職場全体の研修成果の発現度合い等の把握のために受講者の所属長へのアンケート調査を行いました。

3. アンケート調査対象

平成 24 年度～26 年度の受講者及び受講者の所属長

4. アンケート調査実施

受講者の所属長への調査の説明及び依頼をした後、アンケート調査票を配布し、回答を求めました。期間は平成 27 年 11 月 18 日～30 日とし、庁内のメール便で回収しました。

5. アンケート調査実施人数及び回収率

受講者	40 人	回収率	100%
所属長	17 人	回収率	100%

6. アンケート調査結果

（4～6 ページ 参照）

7. 考察

(1) 研修内容の理解と活用について

- ① 研修内容については、受講者の 8 割以上の方が理解できたと回答されていました。「大体理解できた」方々の理解の程度の詳細は結果として出せていませんが、「行動の意味を客観的に見ようと心がけるようになった」「行動の前の出来事や欲求等を考えて対応することができるようになった」等の記述より、行動に焦点を当てて手立てを考えるという本研修の主たる視点は理解していただいたことが分かりました。
- ② 「大体理解できた」方々の多くが「大体活用できた」、「大変よく理解できた」方々が「大変よく活用できた」と回答されており、理解できることが活用するためには必要な条件であると考えられます。一方で、「大体理解できた」方々の中でも「あまり活用できなかった」と回答されていることから、理解できることだけが、活用するための条件ではなく、「形式にこだわってしまう傾向にあり継続には至らない」「理論に沿って行っていたが自信がない」といった記述から、活用にあたっては、フォローアップの必要があると考えられます。
- ③ およそ 8 割の受講者が活用できたという回答でしたが、所属長のおよそ 9 割が活用できたと回答されていることから、研修の受講が現場での活用につながっていると考えます。また、活用の中で感じた担当児の変化・受講者自身が感じた変化についての記述を類似した内容でカテゴリー化すると、「手立てを考えやすくなった、行動や背景から手立てを活かすようになった」等の活用自体に関することが一番多く、現場での活用の実績が示されています。その他、「手立てを実践したことで、子どもやクラスに変化があった」といった活用の効果や「子どもの良い面に目が向くようになった、関わりの大切さを痛感した」等の保育・教育に関わる気づきも見られ、受講者の方々が活用を通して様々なことを実感されていたことが分かりました。

(2) 職場への伝達と職場全体での活用

- ① 研修内容の伝達がほぼ達成されている中で、その方法としては職場全体の会議で一斉に伝達する方法よりも実際の保育・教育の場やクラス内といった少人数の場から始めて全体に広めていくという方法がとられていました。クラス単位で動いたり複数のクラスが戸外遊びをする中で複数のクラス担任が共に子どもたちを見たりする等の保育・教育の現場の特性を活かした効果的な方法であると考えられました。
- ② 所属長から見ておよそ 9 割が研修内容を活用できたとの回答でしたが、その中の 3 割強は職場全体での取り組みを行ったとの回答でした。活用の中で感じた担当児の変化・受講者自身が感じた変化についての記述を類似した内容でカテゴリー化すると、「職員間での共通理解や手立てについて話し合いがしやすくなった」といった個人の活用から職員間での活用へと広げられる成果が表れており、受講者を中心に活用を全体へと広げていくことも保育・教育の現場では可能であることが分かりました。

(3) 理論研修の在り方

- ① 応用行動分析の手法をとりあげた当研修では、大体理解して活用できたという方々が多かったという結果でした。また、今後の研修内容として応用行動分析の手法を希望される方が受講生、所属長ともにおよそ 7 割でした。応用行動分析の考え方は、近年、保育・教育関係の書籍でも取り上げられることが多くなり、身近に感じられる手法の一つでもあると考えます。以上のことから、応用行動分析の手法

を保育・教育の現場で活かせる内容として研修を企画したことは有効であったと考えます。

② 応用行動分析の研修カリキュラムとして、行動の意味の捉え方や手立て等を探る講義と演習を行った後で、受講者が実際に関わっている担当児について『問題行動への支援シート』（宿題）に記入してもらい、それを基に互いに話し合うグループワークを行いました。「グループワークで、人の意見を聞くことで行動の捉え方や手立ての考案等についての理解が深まった」という記述や研修の中で「他の職場の方々と討議することで新たな学びができた」等の発言が多く聞かれたことから、研修におけるグループワークは有効であったと考えます。

③ 応用行動分析の手法をとりあげるにあたり、事前準備として、植草学園短期大学教授の佐藤慎二先生に応用行動分析の視点を取り入れた包括的な行動支援の研修を受けました。行動に視点を置きながらも、子どもの困難さに寄添うことを原則に、いいところを探し伸ばしていくことを優先する支援についても学びました。応用行動分析を研修として取り入れる際にも、行動を見る視点以外についても伝えていくことが必要であると考えます。

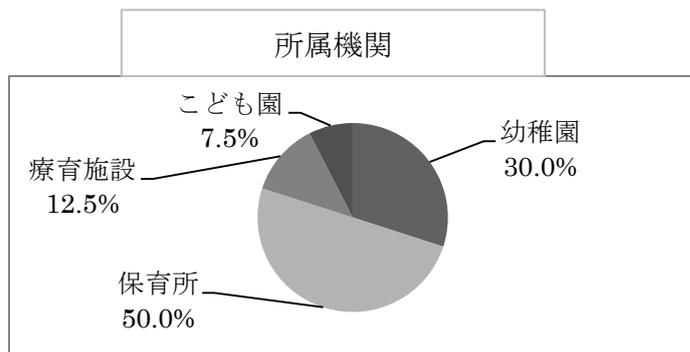
④ 今後の理論研修に応用行動分析以外のテーマを希望する意見もありました。子どもの姿に応じて関わり、活動を展開する保育・教育の視点で考えると、行動を主とする捉え方ではなく、子どもと大人、子ども同士等の関係性を重視した発達支援の理論と手法等、応用行動分析以外の研修内容についても検討していくことが必要であると考えます。

⑤ 保育・教育活動の実際場面やビデオ記録を通して、子どもの姿を見ながら研修を実施することは、より実践的で具体的な支援を学ぶ機会になると考えます。保護者の同意が必要であること等も含め制限も多いことが現実にはありますので、現場のニーズや意見を伺いながら、引き続き検討を重ねていきます。

⑥ 今後の研修に対して、実施回数・期間・場所等の希望には差がみられました。職員数が少ない、行事等が多いといったそれぞれの施設の事情があり、研修の参加については、日常の業務の調整が難しい現実がありました。また、保育・教育の現場では多様な研修が実施されており、研修の企画に際しては、現場での研修内容及び日程等を十分に把握した上で、出来る限り現場に応じた対応ができるように考慮していきます。

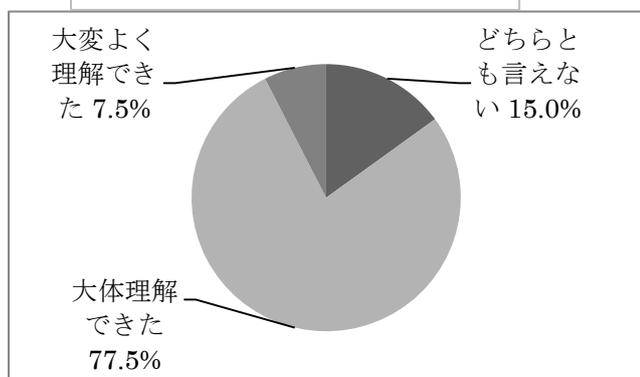
アンケート調査結果

(1) 受講者の属性について

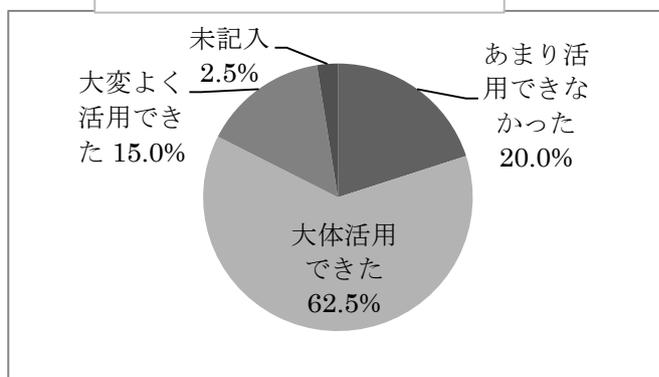


(2) 研修の内容について

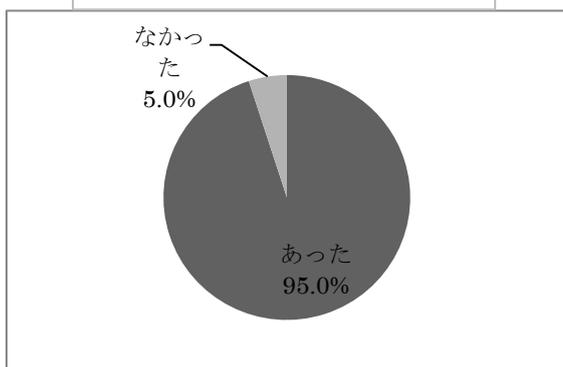
ア. 理解度



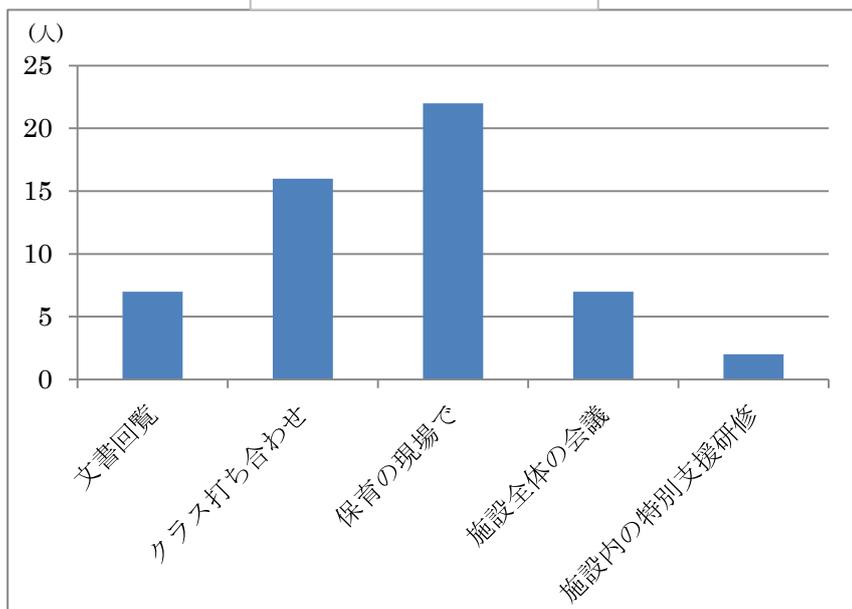
イ. 現場での活用度



エ. 他の職員へ伝達する機会

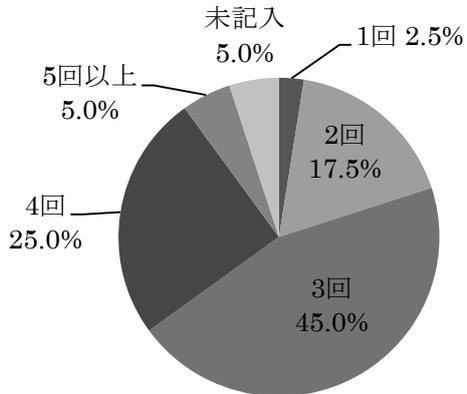


オ. 伝達方法

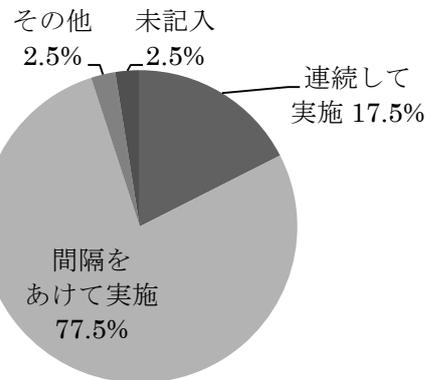


(3) 現場に活かしやすい理論研修のあり方

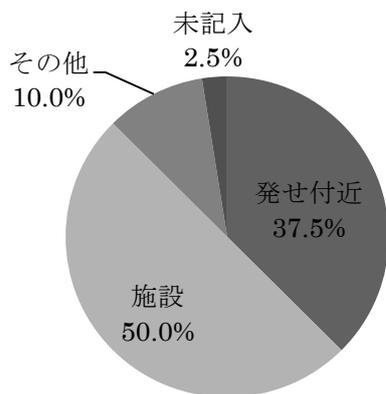
ア. 実施回数



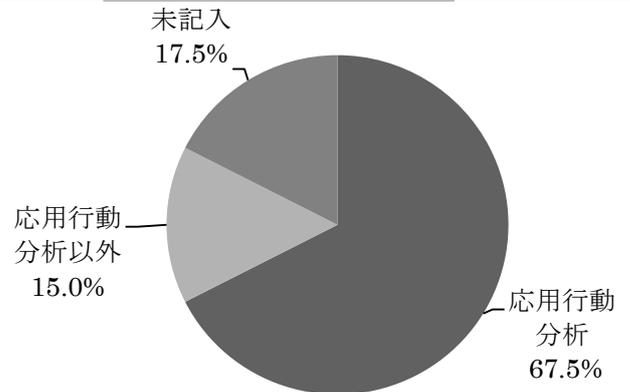
イ. 実施期間



ウ. 実施場所

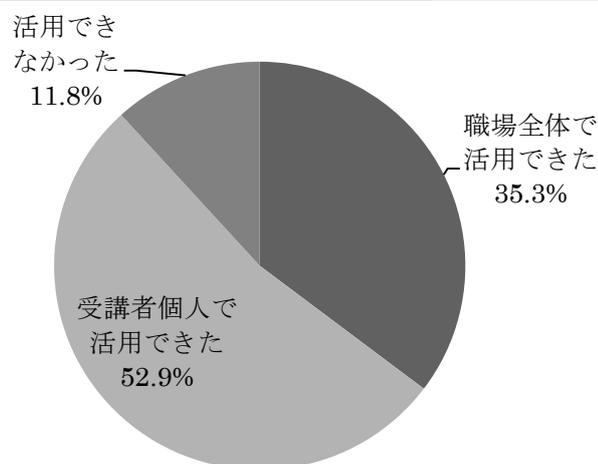


エ. 研修内容



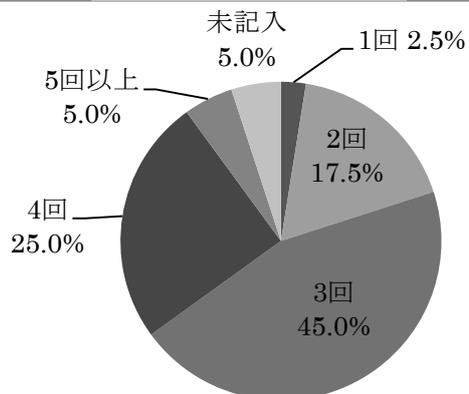
(4) 所属長が感じる理論研修の効果

研修内容の活用状況

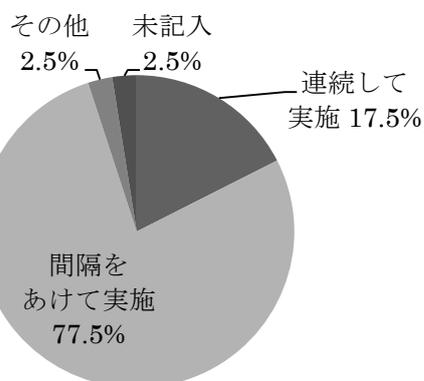


(3) 現場に活かしやすい理論研修のあり方

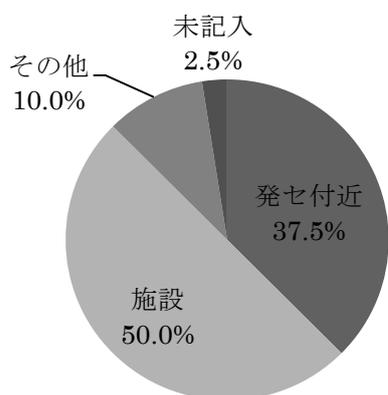
ア. 実施回数



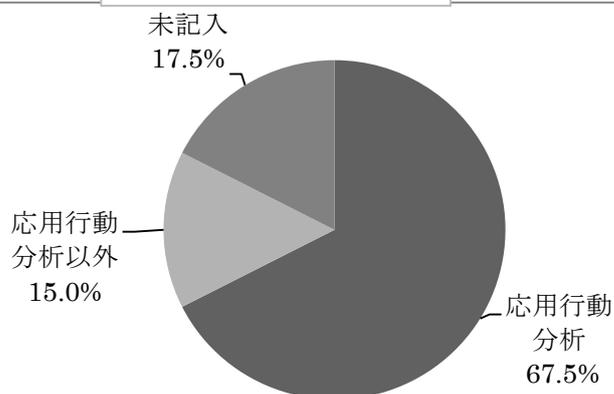
イ. 実施期間



ウ. 実施場所



エ. 研修内容



(4) 所属長が感じる理論研修の効果

研修内容の活用状況

